

審査報告

第9回全国和牛能力共進会の最終比較審査は、鳥取県において開催され、心配された台風15号の影響もなく、天候にも恵まれ、種牛の部（米子市崎津住宅団地）と肉牛の部（鳥取県食肉センター）の2会場において、滞りなく終了することができました。これは、鳥取県全共実行委員会をはじめ、関係者各位のご協力によるものであり、審査委員長として心から厚く御礼申し上げます。

本共進会は「和牛再発見！ー地域で築こう和牛の未来ー」というテーマで開催されました。このテーマに示されるように、和牛に要求される当面の改良の課題を整理した上で、9つの出品区が設定され、数年にわたる各地の取り組みを経て、この最終比較審査の場で、その改良成果の実証と展示が行われました。

今回は、北は北海道から南は沖縄まで、38道府県の参加がありました。本年5月末を締め切りとする参加申し込みは、種牛1,431頭、肉牛1,031頭の計2,465頭でありましたが、全共を目指した取り組みの中で、さらに多くの候補牛が各県で準備され、予備選抜を繰り返した結果による申し込み頭数であることはいまでもありません。道府県の最終予選を経て、最終比較審査に出品された牛は、種牛313頭、肉牛179頭でありました。

これらの出品牛を本共進会の審査基準に基づいて厳正に審査した結果は次のとおりであります。

第1区（若雄）

この区は道府県の改良方針に基づき計画的に作出された種雄牛候補による出品であり、15道府県から21頭の出品がありました。

近年、和牛集団の遺伝的多様性の維持拡大が緊要の課題となっておりますが、その中で、このように各道府県がそれぞれ種雄牛造成に取り組んでいくことは、地域の改良においても、和牛集団全体の遺伝資源の確保といった問題においても、非常に意義のあることと考えられます。今回出品された21頭も、多くが自県繫養種雄牛の産子であり、また、第4区系統雌牛群、第7区総合評価群の出品牛とも関係があるなど、地域の特色を感じさせる出品が多くありました。また、今大会より、前回まで2区に分けられていた若雄の区を1区に統合した結果、出品牛の月齢は15～23ヵ月と幅広くなり、体高は130.6～142.6cm、体重は456～698kgの範囲に分布しました。また、今回の若雄は、発育は平均以上のものばかりでしたが、一部を除き体型的に傑出したものが少なく、1区のいずれにおいても若干物足りない感があったことが惜しまれます。しかしながら、側望均称や体伸に優れ、前回より改

良が進んでいる部分も見られましたが、一方で、体幅や体の緊りに課題が見られたものもありました。なお、栄養度は前回よりも改善されましたが、今後、より理想的な栄養度管理をされ、出品されますようお願いいたします。

上位牛について短評を申し上げますと、優等賞1席は、出品番号15番「宮貞福」号で、鹿児島県の肉用牛改良研究所さんの出品でありました。この牛は月齢が20.9ヵ月、体高142.4cmで、発育、体積・均称に優れ、極めて肉用牛らしく、また、資質も兼ね備えておりました。さらに後躯の幅および内腿の充実にとくに優れたものがありました。惜しい点としては、やや体上線とやや肩付と肘後の充実および骨味が挙げられます。

優等賞2席は、出品番号21番「大仙21」号で、鹿児島県の（有）上別府種畜場さんの出品でありました。この牛は月齢が22.9ヵ月、体高142.0cmで発育、体積・均称とくに体伸に優れており、体上線や骨味については、1席の牛に勝るとも劣らないものでありましたが、体幅、肋張と毛質にやや惜しい点があり、次席といたしました。

第2区（若雌の1）

第2区は全国和牛登録協会認定の改良組合からの出品で、改良組合活動の活性化により増頭意欲の向上とともに、全共への参加者の拡大を狙いとして設けられた出品区であります。

この区には30道府県から33頭の出品がありました。出品月齢は14～16ヵ月、体高は120.0～131.6cm、体重は342～477kgでありました。栄養度については残念ながら7と判定されたものが2頭おり、今後適切な飼養管理がなされるよう希望いたします。

全体の印象は、発育良好で体積に富み、均称が良く、品位に富み、種牛性に優れた個体が多く見られました。一部に体上線の緩いもの、肢蹄に難があるもの、体の深みに欠けるものが散見されました。上位と下位のものとの差が大きいことから出品県によって優劣の差が大きいように感じられました。

優等賞1席は、出品番号32番「かみさつき」号で、宮崎県の興柁哲法さんの出品、父牛は「上茂福」、月齢は15.1ヵ月、体高は127.0cmでありました。この牛は抜群の体積・均称を持ち、とくに体上線が平直で、背腰と肋腹に優れていました。やや毛質に惜しい点はありませんでしたが、輪郭鮮明で種牛性に富んだ素晴らしい若雌牛でありました。

優等賞2席は、出品番号35番「あけみ55」号で、宮崎県の永友浄さんの出品でした。父牛は「茂福」、月齢は15.6ヵ月、体高は127.0cmでありました。この牛はとくに資質・品位に優れており、体上線が平直で、若雌らしい品位を十分に示しておりました。1席に比べて、前躯と中躯の張りやボリューム感の点でわずかに差が出ました。

第2区にはいずれも種牛性の高い素晴らしい若雌牛が出品されました。地元に戻られてこれらの牛が地域の中核になる繁殖雌牛に成長して、さらにその後継となる子供を多くも受け、改良組合を益々元気づけていかれることを期待しております。

第3区（若雌の2）

この区は、29道県より32頭の出品がありました。月齢は17～19ヵ月、体高は123.4～131.0cm、体重は330～518kgでした。各道県から選ばれたものであり、総体的に見て発育が良く、体積・均称に優れていました。一部に、前軀幅や肋張りの不十分なもの、肩端の突出や肩後の充実を欠くもの、体の緩いもの、後軀の形状が良くないものが散見されたことは惜しまれます。

栄養度7と判定されたものは第8回全共の約30%から20%以下に減少し、改善のあとが見られますが、中には過肥と判定され上位入賞を果たせなかったものがあったことが残念でありました。

優等賞1席は出品番号69番「まみ」号で、宮崎県の一萬田七郎さんの出品でありました。この牛の美点としては、発育、体積・均称、資質・品位、尻の形、乳徴が挙げられます。また、とくに肋腹については秀逸の出品であり、特別賞として「肋腹」賞を擬賞しました、なお、惜しい点としては、やや体上線が挙げられます。

優等賞2席は出品番号63番「わかば」号で、鹿児島県の久保フジ子さんの出品でありました。この牛の美点としては、発育、体伸、資質・品位、乳徴が挙げられますが、やや肩端の突出、下胸の広さに欠ける点が惜しまれました。

第4区（系統雌牛群）

この区は本大会から新設された区で、和牛集団の遺伝的多様性の維持拡大を目的とし、現在では希少となりつつある雄牛系統を引き継ぐもの、あるいは、各地域の改良の基礎を造り、かつ今後の遺伝的多様性を担う雌牛系統の掘り起こしをねらった区です。

この区では、各系統の特色と、その斉一性を重視しようという方針から、とくに種牛としての価値を評価していると思われる項目による「種牛性評価」、肉用牛としての体型を評価していると思われる項目による「肉用牛体型評価」、そして、それぞれの系統が持つ優れた特色を評価する「特色評価」の3つの評価法による審査を行いました。「特色評価」の項目は、各系統ごとに異なり、本会との協議の結果、その系統の特徴をもっともよく現すと考えられる項目が選ばれました。

出品は13地域から、雌系11系統、雄系2系統が出品されました。いずれの群においても、

各系統の特徴や地域の改良経過がよく現れた出品でありました。

本来、この区においては各地域の系統の掘り起こしを目的とした出品区の主旨から見れば、序列をつけるべきではないとも考えられるため、系統の特色がよく現れ、斉一性の高いものから上位4点に序列をつけ、その他に対してはすべて優等賞5席とさせていただきますました。

優等賞1席に擬賞いたしました宮崎県西臼杵支所の出品番号135～138番「奥高」系につきましては、特色評価の3項目、「背腰幅」、「体上線」、「体の品位」において最も揃いがよく、優秀でありました。とくに背腰の幅と強さについては特筆すべき特徴でした。なお、この群は、特別賞として「背腰」賞を擬賞しました。また、本系統においては、現在希少となった「城崎」系との関連もあり、希少性のうえでも価値の高い出品でありました。

優等賞2席に擬賞いたしました鹿児島県和牛育種組合肝属支部の出品番号99～102番「しらき」系についても、「体の品位」や「肋の張り」、「骨味」について特色がよく現れていました。しかしながら、斉一性の点からみれば、ほんのわずかですが1席に及びませんでした。地域で長年にわたり受け継がれてきた系統の特色がよく現れた出品でした。

以下、優等賞3席に岡山和牛育種組合の「たま」系、優等賞4席に大分県玖珠郡和牛育種組合の「第7ふゆ」系が選ばれました。他の出品系統については、その希少性ならびに地域における位置づけから、いずれも甲乙付けがたいものとして、優等賞5席で同順とさせていただきますました。

なお、兵庫県淡路和牛育種組合の出品番号91～94番「しか2」系は、とくに被毛の質に優れており、特別賞として「毛質」賞を擬賞しました。

地域に特色ある系統を掘り起こし、今回の出品に至るまでの各地域での並々ならぬ努力に対しまして敬意を表し、今後の系統の再構築のさらなる発展が期待されます。

第5区（繁殖雌牛群）

子牛の市場価値を高めるためには、繁殖農家で生産される子牛を揃えることが大切です。それには母体である繁殖雌牛の斉一化を図ることが重要です。この区では、現役で活躍していて、3産以上し、繁殖成績の良好な雌牛を4頭1群として出品されました。このことは地域の生産基盤を支えている繁殖雌牛の斉一性の評価とともに、改良組合の日常の活動成果が現れる区でもあります。今回は、全国和牛登録協会認定の改良組合や支所を単位として、17県から68頭が出品されました。

出品牛の体高の平均値は133.7cm、体重の平均値は526.6kgでした。前回の第8回全共と

比較しますと栄養度が7と判定されたものは減少していて、改良組合等において適切な栄養管理の努力が着実に進められていることが窺えます。

全体的な印象は、いずれの群も発育・体積に富み、資質・品位が良く繁殖雌牛としての種牛性に優れたものが多く見られました。とくに上位の群では、群の斉一性が高かったことが特徴としてあげられます。残念ながら中に体高がオーバーしたために順位を下げざるを得なかった群がありました。

優等賞1席は、宮崎県宮崎中央支所の出品番号199～202番でありました。この群は発育・体積・均称が良く、資質・品位も申し分なく、揃いも良好でありました。とくに中躯が充実し4頭の揃いが良好でした。栄養度は適度で、群の持つ能力を上手に引き出していました。

優等賞2席は、岐阜県飛騨和牛生産協議会の出品番号167～170番でありました。この群も幅、張り、深み、長さに富み、とくに腹容が豊かで、第8回岐阜全共に若雌牛として準備されたものが再び成雌牛として出品され、その財産を着実に引き継いでいることが窺えました。惜しい点は、体の緊りにおいて群にバラツキが見られたことで、僅かな差ですが2席といたしました。

なお、鹿児島県肝属支所の出品番号203～206番は、体の品位に富み、かつ、斉一性が高い群でありましたので、特別賞として「品位」賞を擬賞しました。

この区に出品された繁殖雌牛は、すでに子牛生産に実績を持っていますので、さらに今後も繁殖が順調であることを期待します。繁殖雌牛は、粗飼料をしっかりと食べさせ適切な栄養管理を心がけていただきたいと思います。そして地元の模範牛として連産を重ね、地域振興に貢献する和牛生産の底力をいかに発揮していただくようお願いいたします。

第6区（高等登録群）

この区は、本会認定の和牛改良組合を出品単位とし、17道県から51組の出品がありました。この区は、第8回全共まで母牛と娘2頭による出品でありましたが、本大会から、高等登録牛の母牛とその娘、孫娘牛による母系3代を1組とする出品へ変更されました。母牛の持つ優良形質が世代を通じて孫娘牛にまで伝わっていること、あるいは母牛の惜しい点が世代ごとに改良されているかを競う出品区であります。

3世代を揃えての出品は、非常に難しいものであったと推察されますが、出品牛は、おおむね発育良好で、体積、資質に優れ、母牛の美点をよく現した娘牛、孫娘牛が出品されておりました。しかし、この区全体としてはややばらつきが見られ、また一部には母牛の優れた形質が子孫にまで受け継がれていない出品もありました。

優等賞1席に擬賞いたしました出品番号252～254番、大分県の玖珠町和牛改良組合からの出品は、いずれも衛藤昇さんの所有の牛でした。母・娘牛・孫娘牛ともに、発育・体積、均称に優れ、とくに、体の品位が素晴らしく、体上線も平直で、肢蹄の強さもありました。また乳徴も揃って良好でした。この群は、斉一性が高く、世代ごとに改良されている経過も窺え、素晴らしい群でした。

優等賞2席に擬賞いたしました出品番号255～257番、宮崎県の小林地区小林支所和牛改良組合からの出品は、いずれも今村鉄男さんの所有の牛でした。この群についても、発育・体積に優れ、体伸、体幅などは優等賞1席より優れた点もありましたが、やや体上線が惜しまれたこと、わずかに斉一性の点で1席に及びませんでした。

なお、特別賞として、岡山県の新見市和牛改良組合哲多支部からの出品牛（出品番号240～242番）が「種牛」賞を擬賞しました。3代揃ってとくに種牛性に優れていたところが評価されました。

第7区（総合評価群）

この区は第7回岩手全共の連動区としてスタートし、前回の第8回岐阜全共で総合評価群とされた出品区であります。和牛の肉牛生産体制は、同じ母集団から次世代を担う種牛を生産する一方、肥育もと牛の生産も行われている現状から、種牛能力と産肉能力を兼備したものが求められます。したがって、種雄牛造成に大きく貢献している育種組合等の組織がある道県を対象として、計画的に生産された同じ種雄牛の産子で、種牛群として17～24ヵ月未満の雌牛4頭、24ヵ月未満の肥育牛群として去勢牛3頭を1群として構成され、14道県から14群が出品されました。

種牛群

第8回岐阜全共と比べて出品牛のレベルが高く、揃いも良く、高水準での競い合いでありました。全体の揃いが良い要因の一つは、14群の内8群が「平茂勝」の産子の種雄牛であり、出品牛が「平茂勝」の孫牛であることも影響していると思われます。今大会のテーマに即して、世代交代を進め、今後は地域の特色ある系統造成につなげていただきたいと思います。

総合評価群の種牛群第1位といたしましたのは、鹿児島県曾於支所からの出品で、出品番号310～313番、種雄牛は「百合茂」で「平茂勝」の息牛でありました。この群は、発育良好で、体積豊かであり、均称も良く、品位に富み、種牛性が高く、非常に揃った出品でありました。やや肘後の充実に欠け、わずかに仙骨が高いことが惜しまれました。

総合評価群の種牛群第2位には兵庫県の美方郡和牛育種組合からの出品で、出品番号278～281番、種雄牛は「福芳土井」でありました。発育が良好で、体上線が平直で背腰も強く、前軀、中軀が充実し、移行もなめらかでありました。また、とくに資質も揃って良好で、品位に富み、種牛性に優れた出品でありました。また、資質においては第1位の群以上でしたが、尻や腿の充実に欠けていたことが惜しまれます。

去勢肥育牛群

総合評価群の去勢肥育牛群の枝肉成績を前回の岐阜全共における成績と比較すると、と畜月齢は23.4ヵ月と変わりませんが、枝肉重量は440.2kgと20kg重くなっており、岐阜全共では約半数の出品セットで見受けられた枝肉重量の基準390kgを下回るセットは皆無でありました。同時に脂肪交雑基準値は2.14（BMS No. 7.2）で、4等級以上の率は約81%と、各道府県の基幹種雄牛が覇を競った9区をも凌駕しているだけでなく、平成18年度に全国で格付された黒毛和種去勢肥育牛のBMS No.の平均5.4、4等級以上の率55.4%を大きく上回っておりました。和牛の種牛性と産肉性を具備する種雄牛の造成による効果だけではなく、各地の母牛集団の水準が確実にレベルアップしていることを反映した成果といえ、総合評価群を設置した所期の目標が確実に達成されつつあることが確認されました。ただし、筋間脂肪が厚いセットが散見され、歩留等級Bの個体が出現したことは惜しまれます。この形質が育種評価の対象となっていないことが原因とも考えられますが、飼料効率の観点から留意すべき形質といえます。

総合評価群の去勢肥育牛群第1位に序しましたのは、岐阜県の「白清85の3」の産子で、出品番号28～30番でありました。枝肉重量の平均は441.1kg、ロース芯面積57.7cm、とくにバラの厚さが8.3cm、歩留基準値は74.8と優れておりましたが、わずかにバラツキがあった点が惜しまれます。脂肪交雑の平均は4（BMS No. 11）と出品セット中最上位で、3頭の成績も非常に揃っており、肉の締まり・きめなど肉質においても非常に優れておりました。24ヵ月未満のと畜月齢の和牛枝肉としては質量の両面から今後の範となるべきセットといえます。

去勢肥育牛群第2位は、北海道の「北勝福1」の産子で、出品番号1～3番でありました。このセットの脂肪交雑の平均は2.56（BMS No. 8.7）と「白清85の3」のセットと比較して劣りますが、肉質の揃いは非常によく、高く評価できます。ただし、枝肉重量の平均が399.5kgと軽量である点は惜しまれますが、皮下脂肪の厚さが1.6cmと最も薄く、ロース芯面積が56cmで、歩留基準値は74.7と肉付き面でも優れたセットでありました。

なお、特別賞として、岐阜県「白清85の3」のセット（出品番号28～30番）を「肉

質」賞に、広島県「原平茂」のセット（出品番号10～12番）はロース芯やバラの厚さ、皮下脂肪厚などの揃いがすばらしく、枝肉断面の「斉一」賞に擬賞いたしました。

総合序列は種牛群の順位と去勢肥育牛群の順位とを合計し、値が小さいものを上位といたしました。その結果、宮崎県からの出品が首席、次席は岐阜県となりました。以下値が同じで同順位となったものについて、種牛群の順位と去勢肥育牛群の順位の差および種牛性の高さを考慮して序列の決定をいたしました。

第8区（若雄後代検定牛群）

この区は、出品牛の父牛に対して、とくに次の世代を託せる高い産肉能力を求めるとともに、世代交代を早めることを目指して設定された区です。前回の岐阜全共以降、現場後代検定法が着実に普及し、各県の産肉能力検定の大半を占めるにいたっていますが、現場後代検定の一層の普及促進と7歳以下の若い種雄牛の早期の発掘を狙った出品区です。

出品牛の父牛は、平成12年の10月以降生まれに制限されたことから、今回の21頭の雄牛の年齢は概ね5歳前後であり、鳥取会場で初めて産子の枝肉成績を披露するものが多く含まれていました。現在は育種価評価が普及し、期待育種価による種雄牛の造成が主流となっているものの、共進会への出品には多くの冒険的な要素が含まれますが、今回、それらの状況・条件を乗り越えて、最終的に鳥取会場には、1群3頭セットの群出品で、21道県から計63頭の出品がありました。

この区全体での肉質等級は、5等級が15頭で全体の23.8%、4等級が25頭で39.7%であり、あわせて4等級以上が63.5%を占めていました。前回の岐阜全共での成績に比べて高い数字であり、同じ5等級の中でも、脂肪交雑はもちろんのこと、肉のしまりや光沢などがとくに秀でたレベルのものも含まれていました。区の平均で、枝肉重量が429kg、ロース芯面積が53cm、バラの厚さが7.3cmであるなど、24ヵ月齢未満という出品条件の下で、枝肉の仕上がりという点で満足できるものが多く見受けられました。前回の岐阜全共の場合に比べると、皮下脂肪厚の平均は変わっていない一方、成績は明らかに良くなっており、各産地での雄牛造成の指標として産肉能力の育種価が有効に機能している証といえましょう。ただし、脂肪交雑の状態の粗いものが散見され、また、現時点ではそれほど気にならない程度ですが、脂肪の質という点で少し固めになってきている傾向が認められ、今後、留意していく必要があると思われます。

優等賞1席は、宮崎県から出品された「安平桜」の産子去勢肥育牛のセット（出品番号61～63番）でありました。このセットは、歩留基準値、ロース芯面積など、肉量と歩留の

点で総合的・相対的に優れておりましたが、特筆すべきは、若い種雄牛を父とする24ヵ月未満の産子という出品条件にも関わらず、脂肪交雑、肉質の良さという点で特にインパクトのあるセットであった点です。3頭セットのうちの1頭については、脂肪交雑が他の2頭に及ばず、斉一性の点で惜しまれましたが、その点を差し引いても、若雄後代検定牛群の優等賞1席の価値があると判断されました。

優等賞2席は、山口県から出品された「福美美」の産子のセット（出品番号91～93番）でありました。このセットは、歩留基準値、ロース芯面積が特段に優れており、また、肉付きの点で極めて優れておりました。BMS No. は7から9のレベルで揃っており、3頭の枝肉の仕上りの点では優等賞1席に見劣りせず、肉量も多く、肉質も優れていましたが、ロース芯が変形した個体があったことが非常に惜しまれました。

今後、高いレベルの産肉能力を備えた種雄牛の早期の造成がますます高い確度で計画的に行われることが期待されるとともに、遺伝的改良を促進する上で世代交代を早めることが重要です。近年、雄の世代交代が遅れる傾向にありますので、若い種雄牛を積極的に利用することによって改良の速度を上げることが望まれます。

第9区（去勢肥育牛）

第9区は単出品の区として設定され、37道府県から去勢肥育牛74頭の出品がありました。この区は、より効率的な牛肉生産の可能性を追求し、24ヵ月という通常よりも短い出荷月齢でどこまで完成した枝肉を作り上げるかが問われた区でした。そして何より9区には、牛脂肪に含まれるオレイン酸の割合を測定し、肉質の評価に考慮するという新たな試みを取り入れたことが特筆されます。脂肪酸の中でもオレイン酸は牛肉の風味にもっとも影響するとされ、これからの和牛改良の方向性を示す意味でも重要な区と位置づけられます。

9区全体の歩留等級はA等級が96%とほとんどを占め、肉質等級は5等級が24頭で全体の32%、4等級が29頭で39%でした。これは4等級以上の率にすると72%となり、全国平均の55%と比較しても優れた成績といえます。月齢制限を反映して枝肉重量は全国平均よりやや小さいものの、ロース芯面積、バラの厚さなどは遜色なく、脂肪交雑においては若齢であったにも関わらず全国平均5.4をBMS No. で1.3上回る結果となりました。

このような優れた成績の中、優等1席に輝いたのは出品番号179番で、宮崎県から出品の「日向国」の産子でした。この牛のBMS No. は12であり、脂肪交雑の状態も非常に良好でありました。やや筋間の脂肪が厚かったものの、74cmのロース芯や9.7cmのバラ厚から受ける肉の迫力はそれらを補って余りあるすばらしいものでした。

優等2席は出品番号178番で、同じく宮崎県から出品の「福之国」の産子を擬賞いたしま

した。この牛のBMS No.も12でしたが、肉全体から受ける印象において惜しくも優等1席には及ばないと判断しました。

優等3席は出品番号137番で、島根県から出品の「糸安茂」の産子でした。この牛のBMS No.は10でしたが、肉量とのバランスの良さが評価されました。

今回の審査におけるオレイン酸割合の利用はまだまだ限定的でしたが、今後は牛肉の風味に関するより客観的な指標を確立させ、枝肉の評価に利用されることが期待されます。

名誉賞（内閣総理大臣賞）については、各区の優等賞第1席の中から、本共進会の開催趣旨に照らして、その目的を達成したものについて選定を行いました。「種牛の部」については、第4区宮崎県西臼杵支所出品の出品番号135～138番、「肉牛の部」については第8区宮崎県出品の出品番号61～63番を選びました。加えて、特定の部位・項目についてとくに優れたものについて、特別賞を決定しました。

以上のことを踏まえて、今回の全共を総括的にまとめ、今後の展望について触れておきたいと思います。

種牛の部については、審査標準の価値観による評価を基本とする審査基準に基づいて序列が決定されましたが、全体として発育良好で、肉用牛としての体型を備えると同時に、均称がよく、資質・品位に富む、種牛としての良さを具備した牛が多く出品されました。第7回全共以降、多くの支部の協力を得て基本登録時に外貌審査に関わる基礎情報が収集され、その後に蓄積された繁殖成績や産子の枝肉成績に関する情報を総合して解析することにより、審査標準の持つ意義が「再発見」されました。肉用牛として求められる体型の意義は言うに及ばず、資質や品位など種牛性を現す審査項目が、繁殖性と関連していることが明らかにされてきました。このように、今の審査標準が産肉性や繁殖性といった経済形質に強く関連していることが改めて見直され、全共を目指す候補牛の選抜にも、大きな影響を及ぼしてきたと考えられます。とくに、上位入賞牛の姿は、何よりもそのことを実証していると考えられます。

登録協会では、今後、上記の分析を踏まえて審査標準の見直し作業を行う計画ですが、今回の全共における実証・展示により、この作業に、より一層の確信を与えるものだと思います。

和牛集団の遺伝的多様性の維持拡大と種牛能力の改良を目指して新たに設定された第4区系統雌牛群の試みは、各系統ならびに地域の特色を受け継いだ牛群が出品され、今後、地域の特色ある和牛集団の造成を目指すうえで、極めて効果的な実証・展示が行われたも

のと思います。今回の共進会を集約点として、系統再構築に関する今後の展開につなげていかなければなりません。

肉牛の部については、第7区の去勢肥育牛群を含め、第8回全共を肉量・肉質ともに上回る優れた成績が得られ、各地で産肉能力の改良が進むとともに、肥育技術の改善の効果が顕著に現れていました。24ヵ月齢未満という若い月齢での産肉性としては、一般出荷の格付成績を上回る極めて優れた結果でありました。自給率の低下やバイオエタノールに関連した穀物価格の高騰の中で、枝肉生産の効率をより向上させることが求められていますが、若齢でも相当高いレベルの産肉性を実現することが実証され、生産効率向上の課題に十分応えうる可能性を示したものと考えられます。

また、個体出品となった9区においては、牛肉の美味しさと健康につながるとされているオレイン酸含量が測定され、序列決定の要素として取り入れられましたが、24ヵ月齢未満という月齢にも関わらず、すでに望ましいとされるレベルに達しているものもありました。このことも、今後の産肉性向上の課題に新たな展開の可能性を示唆するものと考えられます。

このように、産肉能力と種牛能力のバランスのとれた改良の追及、生産効率の向上、新たな産肉性の向上への挑戦、遺伝的多様性の確保、世代交代の促進といった当面の改良の課題に取り組む中で、今回の全共は、その実証・展示の場として、画期的な場となりました。この全共をきっかけに、今後の取り組みが強化され、一層の飛躍が求められるところです。

牛肉生産を巡って厳しい国際競争が続いている中、和牛は、わが国農業の基幹作目として位置づけられ、産業の益々の発展が期待されています。消費者との連携を強め、登録事業を通じ、「安全で美味しい和牛肉」の提供をしていくこと、新たな担い手の育成にも取り組みながら繁殖基盤を強化し、安定した生産を目指すとともに、和牛の経済性の向上を目指してより一層の改良を進めていくこと、課題はたくさんありますが、英知を結集して、和牛産業の一層の発展を期して、登録協会は会員の付託と消費者の期待に応える努力を惜しまないことをお約束して審査報告といたします。

第9回全国和牛能力共進会

審査委員長 吉村豊信